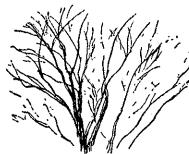


# 幼児の美術教育



——スケッチをしながらのメモ——

周郷博

へ1へ

私は一昨年の十一月からスケッチをはじめた。それからあしかけ三年、いそがしい仕事にとりまぎれて中断した時期もあるが、時間を都合して、一本のコンテをポケットにいれ一冊のスケッチブックを小脇にして、私は何かにとりつかれたようにスケッチに出かけた。その一年数か月、絵のほうはあまり進歩のあとを見せないようだが、本で読んだりしたのとは性質の違う、いろいろなことを考えた。その記憶は、いつかまとめておきたいと思っていた。

美術教育の集りに出たり、講演のようなことをさせられたり、実際に教室へいって見てまわったりする機会がそれまでにしばしばあった。が、どうも他人ごとのように手軽に扱つて自分のことのよう

な実感というものが乏しいという気がしていた。自分のこととしてやつてみたい気がしていたのだ。その直接の動機になったのは、一昨年の十月ごろ、ブリヂストン美術館でみたパウル・クレーの「冬」という絵だった。荒涼とした紫の線の不思議な交錯のなかに、はるかな春を待つて耐えしのんだ音楽のようなものを感じさせる絵だった。

それから間もなく十一月の末に仙台で「子どもを守る文化会議」というのがあってそれに出席したついでに、私は仙台のデパートでスケッチブックを買い、木のある風景みたいなものを描いてみようとして、はじめに、まず、驚くような経験をしたのだった。描けない！——手が動かないばかりではない。自分がどれほどかに何も知らないか！ をつくづく思い知られたのである。そのときに、会

議のあと、二、三の知り合いの人と、葉を落してだんだん裸になつていく街路樹のそばで、ぼくはあの木を描いてみたいんだ——人間

たちがって、冬になると木は幹や枝をおおっていた着物（葉）をいつきい捨てて裸になる、そうして寒い冬を耐えていこうと「決心」でもしているようみえる——そんな話をしたことを憶えている。

## へ 2 ヵ

そのころ——そうして今も——私はあの木を描いてみたいといふ一念に駆られてスケッチをして歩いたのである。もちろん、そうやすやすとは描けない。が、私は冬から春にかけて、まだ芽を出さない木たちが枝をのばしてしまり、または夕方の風や寒さに耐えているのを見るのが好きだった。そういう木と「同一化」をやって、自分の分身のようなそういう木をさがして林のなかを歩きまわった。林のなかでなくとも、街のなかでもよかつた。石川啄木の「今の世のなかには山の奥の巨木のような人間がいなくなつた。」という考え方たが心にあつたのかも知れない。街のなかでも、天に向かって伸び枝を張った自然のままな巨木のおもかげのある木をみつけてそれをよく仰いでながめた。「みんなは何を見ているのかね……が、ぼくのように木ばかり見ている人はいないだらうね」友人と街を歩いていて、ふとそんなことをいったものだった。

スケッチをはじめて、そのころ、私が考えたことは、まず、こうい

うことだつた。

一つは、「最少限の道具で最大限の成果を」（そんなことを最初のスケッチブックに書いた）ということだつた。一昨年の暮のクリスマスのころ、街は、べらぼうなクリスマス景気でごったかえしていたが、私は混雑した渋谷の東横デパートの五階まで上がって十円の鉛筆（はじめはコンテではなかつた）を二本買って帰つてきた。おおくの人々が二千円とか五千円とかいう買い物をして階段を降りてくるなかにまじつて、私はひどく得意で、一種の誇りをもつた記憶がはつきりある。私は他人がつくったものを買ってそれで自分を慰めようなどとしているのではない、これでひとつ何かを「創造」してみようというのだ。他人に幸福をねだつてはなく、それを自分に要求しているのだ。——もちろん、これはやや、というより大いに誇張されたひとりよがりではあつた。しかし、描かれた絵がどんな貧しいものであつたにしても、この考え方たはウソではなかつたし、現代の日本のような毎日の生活のなかには生かしてみたい考え方ただ、と私は今でも信じている。さっそく油絵の道具まで買いそろえたけれど出来あがつた絵は油絵具を乱費しただけの絵だつたとか、皮肉な言いかたをすれば、お化粧に金をかけて自分の顔がどこかへ行つちゃつたようなことは避けてみたい気がしていただの。そのころだったと思う。「一壺のインク瓶の哲学」などというヘンテコなことを考えついて得意になつていて。一壺のイン

ク瓶を買ってかえってそう考えてみたのだが、そのインク瓶のインクをどう使うか？　は、人それぞれに違っているだろう。それをひっくりかえしてガバッとこぼしてしまえばそれでおしまいだが、人によればそれだけのインク瓶で後世に残るような論文を書くかも知れない。私のこの幻想は、人生にも教育にもあてはまるような気がしたが、そう神経質にならないなら、幼児たちの美術教育についての主体性と創造性が大切だということにも通じるだろうと思う。もとも、これとはまったく逆な行きかたで、刺激としてしばらく絵具や筆や紙をあたえてみると、ということも大切なことだということは知っているのだが――。

もうひとつは、これとはやや違つて、スケッチをしていて考えたことだが、昨年の春、木の芽が出はじめるころの木をスケッチしていくつづくわかつたことは、ケヤキとかニレとかブナとかイチヨウとかが、それぞれみな幹のかたちから枝の伸ばしかたまで違つていることだった。そんなことはあたりまえだ、というかも知れないが、そういうことが「じか」にわかつたということは私には驚きであり、芽を出し葉を繁らせるころの林は私にとってこれまでに経験したことのない「壯觀」というふうに映つたのである。そういう木それぞれの個性のほかに、幹にきざまれた年輪（これは想像されるその内部だけではない）その幹の曲線や表情としてあらわれ、また、その枝の伸ばしかたのなかに節とリズムとして読みとれるもの

だつた。幹のうねりと枝の姿体の美しさは、木それぞれの個性とともに、その木が年々冬と春と夏と秋をどう生きてきたかをかくし立てなく語つている。すこしあなたの伸びなかつた枝の一節にくらべて、ぐんと長く伸びた次の年のよろこびも想像できた。それに一おなじように並んでいたイチョウの木でも、一本は崩えるように芽をふいてきたのに、その隣の木は見たところまだ春になつたのを知らないようにはり冬のままでいたりする。

こういうことで私が考えたことは、木たちと電柱との違いだつた。電柱は木ではない。電柱はまっすぐに立つて生きてはいない。木はそれぞれの個性とその雨風に耐えて生き伸びた生育歴を背負つてそれぞれの調子をたたえている。これはまつたく平凡なことだが、私たちはお互い同志を見る場合にも、電柱としてではなく、生きている木として、自分も、そうして相手も尊重していくようにななくてはならないのではないか。おなじ種類の木でも早目に芽をふく木もあるし、ゆっくり芽をふく木もある。それは木の価値とそれほど関係はないのだ、と思った。教育というしごとのなかに、訓練とか、ときには矯正とかいうことさえあるのは当然だとしても、それはけつして生きている木を電柱のようなものにしてしまうことではない！　ちがいないのだ。

ついでに思い出すのは、その木が生えている土地のことだ。インドの詩人タゴールは「木にとっての自由はその木を束縛している大

地から解放されることではない。」と言つたが、木はたしかにその土地にしばりつけられているように生えて天のほうへ向かって（理想を求めて）伸びあがつている。しかし、その土地から解き放されることは木にとつては死を意味している。そういう木が、それぞれに特定の土地のうえに生えている、ということは、木のかわりに子どもとか人間とかを置き代えて考えてみると、私たちが忘れがちな何か大切なことをわからせてくれると思う。イギリスの T・S・エリオットは、それとはやや違つた問題を「文化」ということで言つた

——イギリスの「文化」が櫻の木だとすれば、それがニレの木ではないことを後悔したりすべきではない、と。もつとも、ここで移植とか接ぎ木とかいう問題を考えてみる必要はある。が、それはひかえておこう。

スケッチを始めたころに考えたことをもうひとつ加えれば、私はその二本の鉛筆を買って或る喫茶店へはいって、一種の驚きをもつて考えたことだ。そういう店へはいっている人々は何かやたらにしゃべりまくつていてるか一人で物思いに沈んでいる人々だが、私は何かそこにある木か何かを描いてみようとしているので、すこしも退屈しない。私は孤独のようみてすこしも孤独ではなく、「何かを知ろう」という気持でみたされていた。はじめに帰るが、他人がかりな生きかたの代わりに、自分ができることをやる、ということでいわば余念のないしあわせを感じたのだった。

へ 3 ヘ

そのころ、アルンハイムさんがお茶大で「美術の心理」という講義をしていて、何かの機会に「現実というものにはべつだん線があるわけではない。」ということを言つた。私はこのことばがずっと心のなかに残つた。木を描くにも何を描くにも人は線を使う、が、その線「によって」何か現実にあるものをつかもうとするのだ。言つてみれば、線は、どうでもいいものだという意味ではないのだが（むしろ、それだからこそますます重要な意味をもつてくるのだが）、手段であつて目的ではない、と考えられる。スケッチをはじめた私は、これでいろいろなことを考えさせられた。現実ということばはたいへん厄介なことばだが、線はその現実を「暗示」しているのだ。線がそのまま現実なのではない。木を描こうとして、私はこのことに関係した悩みを経験した。木を描くのはむずかしいけどだし、今もますますそれを思い知らされているのだが、描こうとして描けないときに、めんどうになってきて「それなら、その木をもつてきてこまえばいいじゃないか……」と思つたことがある。しかし、そうすればそれはただの材木か何かだ。線が何かで木を描くということは、木が自分に語つっているもの——自分がその暗示でつかんだイメージを表現するわけだ。問題は向こうにある木であるよりもそれを描こうとしているこちらの自分にある——これはスケッ

チをしていて絶えず痛めつけられる思いで味わわされたことだつた。

或いは学問や知識といったものも、この線のようなものかも知れない。それはイギリス流にいえば *touch of life* (生きているという実感) があつてはじめて現実のものになるわけだろう。私たちは、

すでに出来あがつてある線を現実ととり違えることがおおい。私はイギリスのいちばん新しい教育哲学の本を読んでいて、七歳になる女の子がそこにある絵を模写するように言われたとき「それはもうそこにあるのだから、私はそれをもういちど描く必要はないません。」とその子が言つた、と書いてあつたのを読んでおどろいた。イギリスのおおくの子どもたちがこうだといふわけではないだろうとは思う——そういうことを奨励しているわけかも知れない。が、そのままのアングロサクソン魂みたいなものには敬服した。臨画が有害だとすれば、そこにある絵を現実と思いこまされて現実をじかに自分の眼で見る力を衰弱させてしまうところにあるのだろう。これとおなじ間違いを私たちは現実とその現実についての説明ということについても犯している場合がおおい。説明は現実の理解を助けはする。が、説明は現実の代用物にはならない——のに、その説明がそのまま現実だといふこんでしまつてゐる場合が意外におおいのである。

おおくのひとたちのあいだで、子どもが鉛筆かクレオンで、自身の線の遊びのなかで何かを描くのは、彼ら自身の現実を知ろう

という活動であり、それは彼ら自身が理解した彼ら自身の現実の説明とみてよいと思う。それは、あらゆる知識や説明といったものが接ぎ木される——接ぎ木されてやがて花を咲かせることのできる元木ではないだろうか。

私は、またこんなことも考えた。

絵というものは描けないものだ——一本の木でもかぎりなく複雑なもので、描くことによってそれを知ろうという努力はまったく「绝望」と「不可能」に正面させられてどうにも手の下しようがない興奮におそわれる。その複雑で手に負えないものをどういうかたちでか全力をあげて理解しようとして描かれる。それは人間の知性や科学の何にもました始まりだと言えるだろう。

私はまた「そのものから離れて見る」ことの必要も感じた。そばへ行ってさわってみるようなことも役立つだろうが、そこから遠く離れてみなければイメージははつきりして来ない。そばへ行ってみれば、木は材木みたいに味気なくなることがある。そこから或る距離を置いて見ることを知つたのは、私にとつてなかなかの収穫だった。絵でなくとも、さまざま人生の事象について、これは人が誰でも学ばなくてはならぬものだと思ったのである。

そうしてまた「自分の位置を変えてみること」の大切さも、私がスケッチをしてみて学んだことだつた。私は一本の木を描こうと思つてその木のまわりをぐるぐるまわつて見た。このことも、自分の

位置を変えてみるのを億劫がり新しい見かたができないでいるおおかたのおとなたちにとつて教訓に充ちたものだと思う。美術教育を通じて、こんな基本的なものを学ばせてみるという考えかたも出てきてよいのではなかろうか。

なお、時間をやりくりして夕方近くに植物園や外苑の林へでかけていった私は、一日がはやく終つてしまつて、たそがれどき、疲れ「今日はこれでおしまいになつてしまつた。また明日にしよう。」と自分を慰めて帰つてきた。この気持は子どものころによく経験した、永いあいだ忘れていた氣持だつた。夜がきても時間が平板にどこまでもつづいているのではなく、こうした区切りのきびしさのながで人間としてやれることを精いっぱいにやつたという満足——こういうことだつて、教育というしごとのなかでそだてなくてはならぬ大切な人間的資質の一つだと思う。

へ 4 ヵ

うまくまとめて書くのがむずかしいので、児童の美術教育にどう役立つかとがめられるかも知れないと思う。しかし、私は今こんなことしか言えないのだ。

最後に、私はスケッチをしてみて、スケッチをしている私にどれほど子どもたちが親しみをもつて近づいてきたかを書いておきたい。オタマジャクシをとつていた子どもたちが近所であきカンをさ

がってきてそれにオタマジャクシを何尾か入れて「おじさん、これ家へもって行って描けば……」なんて言って私にくれるほど親しくなつたり、日の暮れがたギンナンをひろつていたいだすら坊主たちが集つてきて身体をすり寄せるようにして「見せて」とせがまれたことなど、この経験は書ききれないほどたくさんある。絵を描いている人には安心して子どもが寄つてくるのだろうか。それとも子どもは本来絵を描くことが好きなのだろうか。おそらく、その両方なのだろう。ともかく、スケッチをしてみて、私は見も知らぬ子どもたちと、それまでになかった人間関係がつくられる、という経験をしたのだ。この点も、美術教育にとつて（むしろ教育全般にわたつて）人が忘れがちな、大切なことではないかと思った。自分の眼でほんとうのことを知りたいと思っている教師こそ子どもたちとのあいだのへだたりをなくして彼らの生きる力に必要なはげましを与えることのできる教師ではなかろうか、と私は考えた。教師はできたら、できあがつた理論や方法を手つとりばやく知つて子どもたちを引きまわし（あるいは上のほうから監督し）たりすることよりも、自分で絵を描かないまでも、子どもといつしょになつてほんとうのことを知ろうとしてみるべきではないだろうか。

私のスケッチの成果は上つたとは言えないとけれども、一年数か月のあいだにそれを通じて副産物のように、こんなことを考えてみた。これは、そのまどまりの悪いメモに過ぎない。